佐東の文化

No.
36

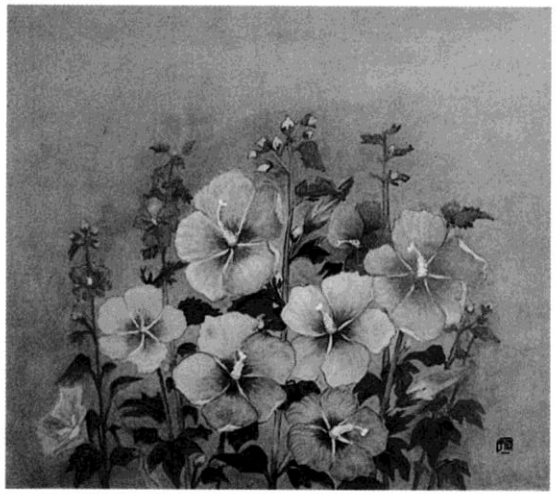
佐東文化協会

題　字

山　本　　章（遺筆）

佐東の文化

No.36



日本画　草野昭子

平成22年10月

目次

巻頭言

文化協会のサポーター……谷口重人……1

特別寄稿

雲魚のこの頃……阿部雲魚……2

江見小学校の頃……岡田千茶……3

白雲美術展……里見明……5

所感寸言

幼き頃の記憶……野村勝志……8

幼年小学校時代と中学校時代　岡出海……9

達観精神を磨いて老後を楽しく　宿野喜一……10

ツーリング……衣笠隼巳……12

随筆随想

言葉比べ……井上健一……15

立派な白内障……加藤美雪……16

月見草の花……岩本全子……17

囲碁と鮎人間……横山廣志……18

歴史紀行

春日の局は林野に住んでいた　宿野喜一……21

老いのたわ言……吉政實夫……22

ふるさと発見

土居宿界隈の活性化に向けて
—今こそ地区民の結集を—……春名正昭……25

詩

同窓会……坂部金治……28

俳句

田植ゑ……春名静山……29

山上の太鼓……江見英雄……29

賀状……青山元江……30

四季の和み……真野雅子……30

折々に……杉本幸子……30

パリの秋……下山紀子……30

花菖蒲……樽井清江……31

山幾重……沖田はるみ……31

青嵐……春名はるを……31

棚田……加藤美雪……31

初鏡……山本靖子……32

枯蓮……髙橋やえ子……32

山津波……山下照夫……32

青葉……樽井悦子……32

秋風……井口秀子……33

山百合……森本久子……33

書初……坂部金治……33

朝の風……山本登山……33

川柳

親友……山本章……34
ふるさと……遠藤榮……34
汗……山本昌子……35
旅……太田智子……35
卒寿の目……山本登山……35
昭和史……春名静山……35
借金苦……山下照夫……36
春夏秋冬……原洋一……36

短歌

大津皇子よ……三浦智江子……37
面倒なのは……入矢敏江……37
老い母……加百由起子……38
涙流しき……黒石貞子……38
「入鹿」の居直り……加藤芳英……38
雨の病室……加藤幸子……38
水害……春名静山……39
幼き人等……江見英雄……39
老ゆる……杉本幸子……39
山里に生きて……安東奈穂子……40
小屋の屋根……坂部金治……40
スポーツ……山下照夫……40
孝行……井口秀子……40
芽吹く……豊田絢子……41
オリンピック……山下三代子……41
癒されつつ……松本哲夫……41
田舎に住みて……松井洋子……41
傘寿の祝……横山美恵子……42
ふるさと……宿野和穂……42
添ひをれば……新免三代……42
わが田……新田千晶……43
黄泉の国……原田順子……43
タケちゃんの声……有元理嘉子……43
夫の縁……岩本敏子……43
果てしなき青……小林洋子……44
看取り……横山昌子……44
夏の夕暮……安西苑……44
笑顔……藤川亜也……44
また仕舞ふ我……清田三智子……45
孫は合格……横林冨砂子……45
友と約して……原幸子……45
川の流れに……野沢老梅……46
さあ行かう……池田保子……46
日常のこと……大内佐智……46
能登香の春……内藤慶子……46
曾孫……光井房子……47
贈り物……鳥形節子……47
いとうつくしき……藤本伸子……47
蜻蛉舞ふ……森本久子……47
師の声……名部みどり……48
夏来たる……井上さかゑ……48
孫の結婚……阿部すみゑ……48
燃ゆる夏……末宗千歳……48
老いの幸せ……加藤保子……49
水禍……船曳文子……49
黄の蝶……北村和子……49
秋……福島美智子……49
川の面……角南三津ゑ……50
豪雨の去りて……中川冨美枝……50
旅の思ひ出……長澤和枝……50
我も老いたり……角利津……51
今しばし……日下智加枝……51
伊勢の神宮……浜田くに子……51
弟……黒石登代……51
夫と娘と……徳野富美子……52
生ありて……釜田玉枝……52
限界集落……江見眞智子……52
達成感……川崎晃……52
現実……坂井はつ子……53
降る雨に……関内惇……53
平成21年度　作東文化協会決算報告……54
平成21年度　作東文化協会事業報告……55
作東文化協会グループ紹介……57
作東文化協会会則……61
平成22年度　作東文化協会会員・役員名簿……63
編集後記……74
〈資料〉作東地域歴史年表

表紙説明

題「朝霧たつ沼」（写真）

福島県秋元湖、三日目に出くわした光と色

小坂田　貢

〔巻頭言〕　文化協会のサポーター

会長　谷口重人

文化協会活動の基本は、グループ活動にあると思います。小さなグループであっても例会を持ち、学習し、創作活動をこつこつと積み上げて行く、その中でこそ地域の文化が育まれてゆくのだと思います。

現在、作東文化協会には、四二のグループとそれに参加されている会員数が、六五〇名にのぼります。よき指導者やリーダーに恵まれていることも相まって会の伸長に大きな力となっています。有難いことです。

一方、会員総数は九五〇名ですから、グループ活動に参加されていない会員が約三〇〇名おられると言えます。もちろん毎年、この〝作東の文化〟誌は受け取ってもらっていますが、直接、会の行事等に参加できなくても、会費をきちんと納めてくださる会員さん、私は、この会員を協会のサポーターと勝手に呼ばせていただいています。

地域文化の進展に理解を示し、その活動者を支援しようとする風土が、協会四〇年の歴史の中で培われて来た結果だと思います。

サッカーの隆盛がサポーターの支援によって支えられているように、文化協会もこのサポーターによって物心共に大きく支えられていると言えます。

私達は、このことを胸にきざんで、平素の活動に専念し、その期待に応える努力をしなければならないと思います。

特別寄稿

雲魚のこの頃

阿部雲魚
（書家　特別顧問）

美作市教育委員会より原稿依頼の手紙を今日拝受して私のこの頃どんな生活をして居るかと思って下さる人達も相当多いと思うので近況を一束御届けしておきたいと思い筆を取った。

仕事は矢張り書家で三つの娯楽の中に住み付いて居る。その三つの娯しみは、書と短歌と画の三つである。自分の短歌を作り、毎日歌を作って居る。一日に十首位から多い日は五・六十首位、案外短歌は頭に在り、娯楽の中でも楽しい部類である。その歌が頭に浮かぶと直ちに書けるので、書は後で歌作りが先である。

読書は、毎日歌集百冊位の中から知人の歌を次々一日三冊位は読み、好みの歌集は何回も何回も読むし、暗記して居るものも随分多い。歌書合一のものである。

日本の風土の変化の四季折々の歌、生涯の生活詠もあるし、専門の美術関係の日本だけでなく外国物も読むので非常に広い歌柄になる。歌と書が生れると一首一首記録して置き、後は読んで三省して居る。

書家という職業は人生経験の上に顕つ学問の領域に入り、宗教的研学も要る。私もキリスト心宗開祖の川合信水師に付き、五年間程、直々教示を受けた上に、四書や五経、禅学等領域は広い。その上、時を得、画を描く、抽象なので頭脳が要るし、表現も全く自由自在心境即画也という調子、三絶（書・画・歌）で広範囲で自由自在に脳裡より出てくるものが、私の芸術である。

売却は一切無く、広汎の人々の眼に付く公益に寄附ばかり、岡山の済生会には四百点位は進上した。貧しい心の病を持つ人々の慰安の一端としての行動である。自分の人間価値を後生に残存させておきたい心での寄附行為で販売は一切しない。それ故、特定の会社、公益団体位のものである。

今年九十八才の今、長い闘病生活もあったし、肺活量も少ない者が片肺の行蔵の日々で信仰の力で生き継ぎ、

日々新しい心境で西施の心の日々で暮らして居り、何の心配もしないし、人の為、世の為に尽くしたい思いで一杯である。

歩行は困難不自由、本日も心機は至って健安、与えられたる生命、何時の日迄つづくか心を刻み、命賀を祈ってこの拙稿を送ります。

皆様方の心身の御健康を祈りつつ。

拙歌一首。

偉いなるものの力にまもられて
今日を生き継ぐ筆を覓めて

（雲魚稿　九十八）（二二・五・二八稿）

江見小学校の頃

岡田千茶
（朝日新聞岡山柳壇選者）

山紫に那岐晴れて　遠く真北の空に立つ
水清らかに吉井川　村をめぐりて行くところ
おお　うるわしの　我が校舎

私が小学校へ入学した頃の、江見尋常高等小学校の校歌である。そういえば江見の町のあちこちから那岐山の頂きが見える。殊に印象的だったのは雪を被っている時だった。小学校は平屋建の校舎が南向きに前後二棟並び、事務棟の南に新校舎と言っていた二階建てに続いて、別棟の講堂があった。一年生の教室は平屋の北側だった。

一年生は男女二教室に別れて、私たち男子の担任は臼井先生という女の先生で、当時のことだから和服に袴を着けていた。近所の畳屋に同い年の美佐子という女の子が居て、よく一緒に遊んでいた。そこの小母さんは常々、「学校へ行きだしたら美佐子と一緒に並べばいいがな」と言っていたから当然私はそうするものと思っていた。

ところが隣の席に、いかつい男の子が座ったから、「美佐子ちゃんと並ぶんじゃ」と泣いた。困った臼井先生は美佐子を連れてきてちょっとだけ並ばせてくれた。それで納得したのだから、たわいのないものだった。

学校の在る江見の町へ出るのには平坦な県道が有るのに、近道だからという理由で通学は警護屋坂という往きはわりあいゆっくりで、下りは急な坂道を何時も通っていた。一年生の三学期の雪の日の下校の時。坂にさしかかったら靴が雪にとられて滑り、なかなか坂を登れないので泣いていたら、追いついてきた近所の六年生の女の子が手を引いて登ってくれて助かった。

何年生の時だったか覚えていないが、あまり高学年でないとき、学校のすぐ脇を流れている溝に、どうしたわけかはまってずぶ濡れになった。一旦家へ帰って学生服を一張羅の洋服に着替えて行ったことがある。

小学校時代で思い出すのは、師範学校を卒業してまだ間のない担任の丹原先生との出会いである。私たちは五年生になったとき、男女共学の二学級に分けられた。一説には我々のやんちゃが過ぎるので女子を入れることでおとなしくなるとの考えだったようだ。当時、学校の隣に在った片倉製糸工場の工場長の娘で、田舎とはひと味違う都会風の垢ぬけした子が居て、誰もが憧れていたから、彼女と同じクラスになればいいがと願って居たら、偶然一緒になれてほっとした。

それは兎も角、丹原先生は国語教育に熱心だった。私は綴り方といえば、それまで苦心して何時も作り事を書いていたが、二学期になって、その頃の農家の子供の誰もがしていたように稲刈りを手伝った。そのある日の一日のことを原稿用紙四枚半に克明に書いた。それが思いがけず先生に評価されて、綴り方の時間にみんなの前で披露された。そして原稿の余白の半ページ一杯に赤ペンで良かったよかった、と先生の文字が踊って居た。それから綴り方が好きになったことは言うまでもない。

小学校の頃のことで忘れることのできないのは、母の死である。三年生になって間もない五月、担任の先生が「お母さんがわるいと近所の人が迎えに来られたから帰りなさい」と言われる。家に帰ったが父と祖母は母につききりで、私は三才の弟の守りを任せられたが、母がそれ程重体とは思わず、弟を父の手作りの箱車に乗せて遊んでいるうちに知らぬ間に母は亡くなった。

母は、呉服小間物を商っていた私方の店番をしながら小物などミシンで手作りをして売っていた。日頃の無理がたたって肺結核を患っていたのだ。ある晩、ミシンを踏んでいる母にもたれるようにして、宿題の答えを尋ねたことがあるが、相手にしてもらえなかった。母との記憶中では、これともうひとつ、何でだったか訳は忘れたが、立ちはだかって私を見下ろしひどく叱った母の顔である。後日、台風の出水で家財と共に写真も流されたので、これが記憶に残っている唯一の母の顔である。

白雲美術展

里見　明
（書家　特別顧問）

「新加坡日本人會」と大書された看板のかけられた日本人会館の玄関を入ると正面に「白雲美術展　宮本武蔵の里、岡山県美作市より来星」と紹介文が目に飛び込んできた。人と人との出会いとはふしぎなもの。戦後、日本人として最初に尊父の事業のあとを継ぐため新加坡に渡った石崎氏夫妻との出会いがなかったら、今回の美術展は開けなかったと思う。私は訪星は二度目だが、六年前と比べ、ひときわ躍進した市の変貌ぶりに驚いた次第。正式名称はシンガポール共和国、人口約五百万、広さは日本の淡路島ぐらい。また東京都二十三区に等しいとも言われているちっぽけな島国であるが…さすが世界の観光都市と言われるだけあって美しい。美観と治安を守るためのさまざまな法律やきびしい罰金制度がある。ゴミのポイ捨て、喫煙場所以外での喫煙、公共場所でツバを吐いても罰金とか。戦後四十年の短期間にあれだけの国にしただけのことはある。

さて、今回の旅行目的は、単なる観光旅行だけでなく、異国での美術展を開こうという大それた計画に踏み切ったのである。つまり、同行二十名が各自平素の趣味を生かした作品を持参搬入し、展示発表しようというもの。二〇〇八年にオープンしたばかりの日本人会館（五階建て）の一角で、少しオーバーだが今の日本の姿を見ていただこうというもの。四季をもたない常夏の国新加坡では、美しい秋のもみじの錦もなければ、雪山の美しさも見ることができない。

そこで、写真による「日本の春」と題して、美しい桜の花ざかり風景や日本伝統行事の「鯉のぼり」や「雛まつり」「武者人形」。四季折々のちぎり絵や押し花。レース編み。手編みのセーター。古布を活用した創作人形の羽子板や、古着を再生した布ぞうり。白雪の峰をバックに赤い柿の実のたわわに実った農村風景や、武蔵が幼児期過ごしたと言われる播州平福の昔を偲ぶ白壁の街並みや石垣を巧みな油絵にまとめた作品。また折り紙細工や直径十五センチもある糸玉の数々。出発直前に間に合わせたという東京のスカイツリータワーの今の姿をカメラに収め、拡大して見事に仕上げた写真等々。その他母の短歌「ふる里」を半折の書軸にしたもの、「愛」の一字を大胆にゆったりと揮毫した作品、「燦々」と色紙にまとめた書作もあり、手前味噌ながら変化に富んだ作品群。母やふる里のぬくもりをじかに感じさせるに十分な美術展だったと言えよう。折よく期間中、在留日本人の方々の集会もあり、大好評だったと聞く。祖国を遠く五千キロ余も離れたこの地にあって、なつかしい母国の姿がまざまざと思い出され、心癒されたひとときだったことと思う。また会場に来て下さったシンガポールの方々（中国人、イギリス人…）が皆、目をこらし、珍しがり、作品を鑑賞してくださったことは、「芸術に国境なし」の感をより深くすることができた。

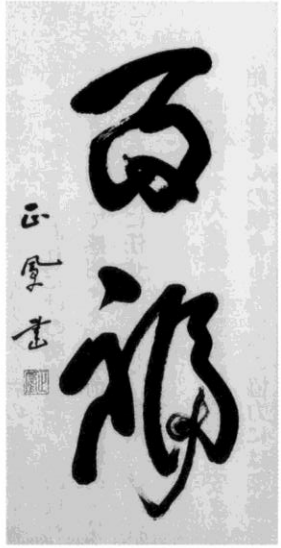
途中マレーシアのマラッカ一泊の世界遺産めぐりの旅を終えて、新加坡に帰り、再び日本人会館へ。展示会場の片付け後、同館二階ホールでの石崎氏夫妻主催のサヨナラパーティに出席。市ロータリークラブから五組のご夫妻の臨席も得、バイキング形式で終始なごやかな雰囲気で楽しい時間を過ごすことができた。私はロータリーの方々とは六年めの再会だったが、昨日も会ったばかりのような親密さで交わす握手のあたたかさが、胸にジーンとくるような感動の連続であった。

七月六日午前八時二十五分、関西空港に無事到着した一瞬、出発前のあの不安も、四泊六日の旅の疲れもいっぺんに吹っ飛んだというのが実感だった。同行の皆さんのおかげで、私のような未熟な者の無謀にも等しい計画にもかかわらず、あれだけの美術展が、あのはれ舞台で盛大にできたなんて感謝々々。事前に会場の下見もせずにすべてを石崎氏に任せっぱなし、電話だけの打ち合わせだったのに…。

また、日本人会館の杉野事務局長、光安まち子さん他会館の皆さんの親身も及ばぬご協力には深甚の敬意を表します。さらにオーシャニッド旅行社西座社長のご尽力にも厚く感謝の意を表します。出会いのありがたさをしみじみと感じた旅でした。

所感寸言

感想や批評を文章で表現する
簡単そうで難しい
しかし文章化されることで
新たな感想や批評が生まれる



書道　福井　正

幼き頃の記憶

野村勝志

私が物心のついた昭和十年前後は国の内外は激動の時代、世界的大不況、五・一五事件、二・二六事件、支那事変へと我が江見村も不況ながら文明開化繁栄への時代。

昭和九年十一月、姫新線東津山＝江見間の開通・江見町政施行とそして昭和十一年四月、姫新線全線開通する。

その祝賀行事の賑わいを覚えている。

この工事の江見の部分は、辰ノ原境の発破・盛土・レールの布設・レール加工場・官舎・道路新設・稔橋の建設及びその他工事の様子を覚えている。

待望なりて、汽笛を鳴らし、轟音をひびかせ走る汽車を間近に見て歓喜したのをいまだに忘れられない。

小高きところにある我が家からもよく見えた。

江見の南にある製糸工場（当時日東）、片倉となり拡張繁栄し、大きな煙突が威容を誇っていた。

江見の町は会社と共に繁栄したであろうが、やがて戦時となる。

当時の町の主なものは、南から安東医院、江見尋常高等小学校（児童数五～六百人はいたと思う）登記所、公会堂広場は、幕莚囲い莚敷き、時には青天井で芝居地芸映画などでした。

上映は、四谷怪談・水戸黄門の記憶がある。

大還橋東詰北に駐在所、南には旅館に始まり多くの商家があり、記憶が交錯する。

上ノ町には、山裾にいんべ瓦工場、その登窯は忘れない。

栄町は新町と言い、空地もあり、新開地であった。

町裏は、江見田んぼが広がっていた。

新町の主なものは、江見村役場・山田医院・信用組合と倉庫・旅館・商店製造・加工店など二〇以上は覚えている。

町外れのこんにゃく屋裏に市場・山家川まで、東側は、田んぼ、西側は、姫新線の官舎と加工場があり、開通後は元の田んぼになった。

川崎へ入れば報恩寺の参道の美し

い桜並木・その横では黒瓦窯・日指道の毘沙門様の大きな石灯炉・石屋・綿打屋・普門寺・江見神社など。

街道は珍しく、小さな日の丸バス・三輪自動車・尿垂れ流しの牛馬車・人力車、通行人は草履、下駄、くつなどあるにあったが、雨降りは番傘雨よけ、はねのけ、使い分け、人通りも多かった。

幼年小学校時代と中学校時代

岡　出海

幼年小学校時代

私が歩けるようになった時、頭には絶えず防空頭巾でした。外では近くにあった小さな防空壕が遊び場でした。

小学校の入学写真では、藁ぞうり、ゴムぞうり、一人だけ運動靴でした。担任は、竹田の女の古井先生で、何かにつけて叱っており、先生はこんなに怒るものかと驚きました。勉強はあまり好きではなかったのですが、数学が得意で理科の実験は楽しみでした。小学校の高学年では、川では魚取り、また地元神社の境内で三角ベースの野球もどきに興じました。夏休みには廻りの溜池や川で水泳の明け暮れでした。小学校時代はあまり勉強はしていなかったような気がします。六年生の修学旅行は、前の年に、宇野高松連絡船「紫雲丸」が沈没し、大事件でしたが、私達も香川県に行き、栗林公園や屋島に行ったところです。家は農家で、父親が病弱であり、母親は朝早くから田畑の作業に追われ、私はできる手伝いを一生懸命やりました。農作業は、済めば終りの単純な作業の繰り返しであり、一生懸命手伝いました。

中学校時代

土居中学校に進級し、いきなり一斉テストと称する、中学一年から三年までの全校生徒で、小学校五・六年生位の問題でしたが、テストがありました。成績は上位にランクされ、勉強やテストの面白味も覚えました。各学年とも学期の修業式に努力賞と称して、ノートや鉛筆を貰うのが楽しくて大いに励みとなりました。学校の授業の復習や予習、休みの宿題の取り組みなど勉強の自己管理もこの頃身に付けたように思います。自転車で林野の松島書店に参考書を買いに行くのも楽しみでした。土居中学校に、岡大出の木村先生、妹尾先生が赴任され、校長以外の先生は、代用教員が多く、大声で叱るだけの先生達でした。

三年生の修学旅行は、大阪、京都、奈良でした。大阪の「粟おこし」、京都では、二百円前後の小物が沢山あり驚きました。奈良公園では鹿を見ることができました。

私の家畜の出合いは、小学生の頃、山羊を飼っており、私は乳絞りの役目でした。また、和牛を常に二頭飼っており、私の役目は餌やりでした。産卵鶏も百羽程飼っており、卵は病気にでもならない限り、口にすることはありませんでした。

米、麦、菜種以外では家畜用のれんげを栽培していました。畑では、はっか、畑わさび、夏秋キュウリを栽培していました。

達観精神を磨いて老後を楽しく

宿野　喜一

私たちは、限りある時間を生きることに価値を見出すべきです。

何時死ぬのかを知っている人はいません。死は予告無く、突然訪れるものです。

人生は、幼少期、少年期、青年期、壮年期、中年期、老年期に分けると、幼少期は育ちの時期、少年期は学びの時期、青年期は巣立ちの時期、壮年期は働きの時期、中年期は熟成の時期なのです。一生の時間からみると、人生は右のような段階に分かれており、それぞれの段階で特徴的な生き方を経験するのです。

そして最後の老年期は、実りの時期だといえます。それ迄の人生経験

を巧みに組み合わせながら、人生を集大成する時期です。

六十年、七十年、それ以上に生きていれば、それなりに様々な経験もあるものです。そういった経験を生かして、人生で最高の時間を過ごすのが老年期です。

こういった人生の纏めの時期だからこそ、老化に対抗するのではなく、老化を楽しみながら元気に過ごしたいのです。

私たちの体は脳で生かされ、脳の指令によって体の様々な機能は働かされているのです。それ故、気の持ちようによって体は如何様にも変わるのです。

元気で長命な老人たちの多くは、自分は健康で元気だと自信過剰気味に思い込んでいるのです。体が多少痛んでいても、元気だという気持ちでいれば、体の故障も現れてこないでしょう。

病気に対抗して症状がひどくならないように働いてくれる細胞が体の中にあるのです。脳が楽しい気分になり、笑いが起きると、その細胞が活発に働いて病気の症状を軽減することが科学的にも明らかにされているのだそうです。何としても老化に負けまいと頑張りすぎると、かえって健康を害したり元気をなくすることになります。

それよりも、老化を楽しんで、老化と仲良く付き合うほうが健康的であり、元気を保てるのではないでしょうか。

脳は何時も心地よい状態でいたいものです。脳が心地よい状態でいるとき、心身ともに健康で元気な状態を保つことができるのです。

その一つの方法は好きな人と、一緒に過ごす時間を持つことです。とくに進められていることは、好意を感じている異性と過ごすことです。好きな異性と一緒に過ごすことは、脳が心地よさを感じることです。それが精神的安定を生み出し、肉体を元気にさせてくれる大きな要素です。

私たちは既に『老人』という称号を何時の間にか与えられ、それを境に老人介護だの、老人医療、老人年金、老人クラブ等の対象にされ、老人という烙印を押されたからには、それに似合った生き方で応えなければなるまい。そして年老いた夫婦の中には、お互いに仲睦まじく愛情関係を保っている人達がいます。そういった夫婦は、若さに満ちています。老いない体、老いない心をつくるには、夫婦共に何時までも仲睦まじく愛し合うことが大切なのでしょう。

不幸にして連れ合いを亡くした人は、新しく愛する人を見つけて、その人を大切にして、二度目、三度目でも愛することができればいいじゃないですか。とにかく、異性を愛すること、恋することができるのは、若さを保っている証拠です。

好きな人が現れると、年甲斐も無く赤面するような経験があるとするならば、これも一つの性の在り方で年老いても性と無縁になることはありません。年老いてからこそ楽しめる成熟した愛情を経験できるのです。

所詮、人間は一人で生きることは難しいものです。いくら一人暮らしが好きでも、誰かの存在を感じながら生きているのです。そんな時、恋しい人の存在を感じながら生きられれば老け込むことはなくなるでしょう。

ツーリング

衣笠隼巳

今年も文化誌の原稿締め切りの時期が近づいたが、別段これと言ったねたもないし、浮かびもしない。今年は止めようかとも思ったが、まあ自分のあったことを少し並べてお茶を濁すことにした。

気候がよくなると年甲斐もなくツーリングがしたくなる。妻の「はね転んで怪我でもしたら、人に笑われるで！気を付けて行きんさいよ」のご忠告をハイハイの二つ返事で返し、鉄馬に跨がる。心地よい振動を感じながら走る壮快さは自動車では味わえない。

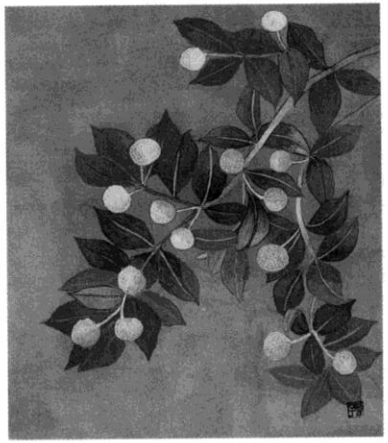
―とその時、道端から突然、止まれと書いた赤い旗。しまったと思ったがもう遅い。だが、まてよ。スピードは出してない。ヘルメットは冠っている。酒は勿論飲んでない。不審に思いながらもしかたなく停車した。見ると向うの山際にはパトカー、白バイ、おまけに机まで用意してお待ちかねだ。

すると、さっきの警察が近づいて来たが、少し様子が違う。普通なら免

許証の提示を求めるなり、パトカーの所へ行けとも言わない。

私が怪訝そうな顔をしていると「失敬します。珍しい車ですね。何年製ですか？メーカーは？排気量は？」ときた。そして「ボクも、こんなのが欲しいなあ。有難うございました。じゃあ、お気をつけて」だって。なーんだ、そんなことだったのか、桑原、桑原、胸を撫で下ろし、キップを頂かなかっただけよしとして複雑な気持ちで無事家へ帰りました。

そして、思いました。同じ取り締りをするのなら、夏、土曜日の深夜などに爆音を響かせ、走り廻るのを厳しく取り締った方が事故も減るし、みんなも喜ぶ。その方が実入りも多いと思う。



日本画　小坂田　初　子

随筆随想

おりにふれて
感じたことや
見聞・体験を
なにくれとなく
書き綴る
思いのままに

洋画　岩崎久富

言葉比べ

井上　健一

吉野に『きんちゃい館』と言う販売所がある。

『きんちゃい』と言うのはこの地方の方言で、『いらっしゃい』と言う意味である。

日本語には大別して、共通語と、方言がある。今回は共通語と、全国の方言の内、同じような発音や、書き方で意味が全く違う言葉を、この地方の方言を混ぜて、紹介しようと思う。

この地方じゃぁ『たくあん』を『こうこ』と呼んでいるんじゃぁけど、東北か、北陸じゃったと思うんじゃぁけど、熊を『こっこ』と、呼ぶんじゃぁそうな。漬物と熊じゃぁほっこう違うでぇ。

『○○しなさい』と言う共通語に対し、ここらじゃぁ『○○しんちゃい。』ちぃと南部に出りゃぁ『○○されぇ』か『○○しんさい』ちぃと変わってくりゃぁ『○○しねぇ。』

おなじ県内でもこれだけ違うんじゃぁけん、他府県の人とのトラブルが起りやすうもなる。

こねぇな話もある。県外の人とお見合いをした人が、返事が長引いていたので、先方に「返事はどねぇしたん、早ようしねぇ。」と言うたそうな。

この相手が県外の人じゃったけん、即破談になってしもうたそうじゃ。

ある所じゃぁこねぇな話もあったそうじゃ。

仲の良い友人が、マージャンをしていたそうじゃ。後ろから眺めていた人が「いかさまなぁ。」と言うたんじゃぁそうな。

これを聞いて友人は、「なんやて、イカサマなんて、してへんで。」と、ひどう怒りだしたそうな。

この場合の『いかさま』とは、『なるほど』と言う意味を喋ったんじゃろうけど、どぇらい誤解をまねいてしもうたんじゃぁ。

普段使い慣れている言葉でも、場所を選ぶ必要があると言うことじゃぁ。

立派な白内障

加藤　美雪

何故立派な白内障と題をしましたか申し上げたいと思います。

私は米寿を越しました。腰にはマックスベルト、足にもサポーターを付けねばなりません。其の上、大腿骨を折り、金を入れて居りますが、五年を過ぎまして今の処、痛みません。どうにかシルバーカーを頼りに腰をかけて一休みをして、また歩けますので、どうにか散歩ができ、嬉しく思って居ります。新聞雑誌など読んだり日記も書きますのが忘れ勝ちになり、眼鏡をよく眼に合うのにしてもらったらと思い付き、眼科の医師にみてもらいました。すると白内障で、手術をするか、眼鏡をかえるかは「自分で決めることです」と言われました。

二年が知らぬ間にたちまして、その間、いよいよ皆さんから、白内障の手術をしたいが、つかえて順番がなかなかこないなどと聞きまして、紹介状をやっと書いてもらい、いよいよ手術の先生の医院を訪れました。検査をして頂きましたら「立派な白内障」ですと診断していただき、いよいよ手術を実行することに決定しました。心電図専門のハートクリニックで検査してもらったら、年の割に元気で大丈夫ですよと言われ、六月上旬に両眼を手術して頂いたのです。遠方の景色、テレビ等よく見え、一層美しく色よく眼に映り、安心しましたのですが、手元の字はボヤッとしてよく見えず、レンズを使用せねばならないのです。先生に御相談しました処、度の合う眼鏡を造って頂くよう度数を調べてもらい、眼鏡店でやっと造ってもらいました。手元の字もよく見えるようになって今ではこれでよいのだと思います。

遠近両用の眼鏡と思いましたが、足元が不安定で危ないように思われますので遠方の方は眼鏡をはずして見ることにしました。

病気の眼も立派な白内障と言って頂きましたことが私にとりましては励ましのお言葉と思い、先生のお言葉は一生忘れられなく、深く感謝致しまして長生きをせねばと思われます。

月見草の花

岩本全子

黄色く、可憐な、そして、どことなく、さみしい月見草の花、主人が大好きでした。今年は見事に家のまわり一面に咲き誇っています。夕方、月の出る頃からスパッスパッと音がするように花びらが開いていきます。あたかも私を勇気づけ、励ましてくれているようです。「大丈夫、頑張ってますよ！」と思わず花に言ってしまいます。

丁度三十年位前のこの頃、幼稚園の職員旅行があり、毎年参加していました。その中でも忘れられないスポットがあります。上高地です。あの梓川を下流へ歩くと、これまで感じたことのない神秘な山々、残雪の絶景、そしてアルプスが映っていました。絵やテレビでは観ていましたが、実際に目前にすると感動の連続でした。あの川へ石を投げて遊んだこと、雲がとぶように流れた不思議感、あれが奥穂高、乗鞍岳、槍ヶ岳と二人で眺めたかったなあ！そして主人の好きなライチョウ、ホシガラスにも会いたいなあ！と。「ああもう一度いつか主人と来たい！」その時思いました。「フルムーンはここだ」と。でも仲々その機会もなく、一人になってしまいました。

毎日、仏様に手を合わす時、主人のやさしさ、心の大きさを思い出します。誰かに教えていただきました。「三百年したら、また一度会える機会がある」とのことです。私は会いたい、本当に会いたい。

書道　篠山定子

囲碁と鮎人間

横山廣志

かねて、岐阜県の美濃市から石川県方面へ向けて、東海北陸自動車道を長良川沿いに郡上大和へ旅をしました。

ときは八月、印象に残っているのは長良川での鮎掛けの釣り人の多いことに作東地域を流れる吉野川を重ね、想いを馳せました。昭和四十年代までは、吉野川にも阪神方面から泊まり込みで来られ、地元の釣り人を加えると、ところせましと「鮎掛け」の光景をたくさん見かけたものですが、近年は極めて少なくなりました。この漁法は大方の人がご存知のことと思いますが、釣り経験の無い方のため申しあげます。魚釣りは、竿の先に「釣り針」のついた糸を垂れ、魚の好む餌をつけて魚を釣りあげるのが普通の釣りです。しかし、鮎は石・岩にくっ付いた藻を食べます。そして自分の縄張りをもって他の鮎がそれに入ってくると、追い出す習性をもっています。「鮎掛け」は、その習性を逆手にとって、あえて縄張りの中に「針」のくっ付いた友鮎を入れ込むと、それを追い出そうと突進してくるため「針」に引っかかり、人間に釣られてしまうのです。これが、鮎掛けの原理です。この漁法は、「織田信長」の時代から行われていたと言われます。それから四百年余り経った今も鮎掛けが続いています。鮎は自分の縄張りはさることながら、水面の上は見えません。地上の人間のことがわかれば、その時から鮎掛けは成立しません。これを人間に置き換えたとき、自分の縄張りに拘り、水面の上が見えない人、他人の言うことを聞き入れ難い人を「鮎人間」と呼ぶことにしました。

囲碁は、陣地を囲み、陣地の目数（面積）の多い方が「勝ち」のゲームです。一見、単純なゲームに見えますが、奥の深いものがあり、一生を過ごす人生観にも通ずるものがあります。戦国時代においては戦の戦法に通じると言うことで、天下統一を目指す信長をはじめ、戦国武将は囲碁を愛し、打ちました。江戸時代には将軍を始め、武士の間で打たれ、社交の具でもあり、女性では「篤姫」の囲碁はテ

レビドラマでも放映されるなど、大変含蓄のあるものです。

含蓄と言えば「国語辞典」のようなもので、国語辞典は「あい」と言う言葉からはじまり、「わんりょく」と言う言葉で終わります。愛はいろいろな愛があります。「親子・兄弟の愛」「師弟の愛」「友人愛」「男女の愛」そして、「わんりょく」は「怒った感情の腕力」「利権を得るための腕力」何れも心に、または、体に傷つきます。腕力を行使しないためには「あい」から「わんりょく」の間に何万字あるか知りませんが、この間にある単語・言葉を遣い尽くせば如何なることがあろうとも腕力を振るうことが無いかもしれません。

囲碁は一八一個の黒石と一八〇個の白石を使い、交互に打ちますが、最初は、布石、中盤戦、終盤戦と進み、陣地の取り合いあり、石の取り合いと攻め合いあり、紆余曲折あり、駆け引きは急戦法あり、平和構成あり、「悲喜こもごも」です。対局が長引くと精神力に加え、体力と忍耐が必要です。常に大局感を養い、「鮎人間」にならないことが囲碁上達の方法と思います。

生花　樽井悦子

歴史紀行

大きなできごと
些細な歩み
みな
人間の歴史

かたりべとなって
伝えよう

ちぎり絵　青山　美和子

春日の局は林野に住んでいた

宿野　喜一

戦国時代と言わず、戦いで敗者となった人物の子孫は殺されるか、運良く助かっても、出世コースから外れたまま生涯を終えるのが普通であるが、中には例外もある。

それは、徳川家光の乳母となった春日の局である。

その名を「お福」と言って明智光秀の将、斉藤内蔵助（光秀の妹婿）の娘として生まれ、十四・五歳の頃、小早川秀秋の臣、稲葉政通に嫁した。その父斉藤内蔵助は、光秀の重臣として行動を共にし、山崎の合戦（秀吉と光秀の戦い）にも参加して豊臣秀吉によって処刑された。その娘のお福（春日の局）も母と共に逃亡生活をし、その父内蔵助の妹が嫁いだ土佐の長宗我部元親にかくまわれた。このお福が後の春日の局である。

そんな素姓の春日の局がどうして家光の乳母となり、しかも家光の代に絶大な権力を奮うことができたのだろうか？

そして死ぬまで将軍家光の信頼を受け、幕府の大奥にあって女としては最高の地位を占めていた女傑であった。

春日の局（ツボネ）と言う称号は後水尾天皇から紫衣事件（僧の最高位の衣、勅許が要る）の時に戴いたのである。その局、お福の若い時代、慶長五年（一五五八年）に関ヶ原の戦いがあって、小早川氏が岡山城主になると、夫の稲葉政通は林野城主を命じられた。政通は妻お福と子、正勝を連れて慶長七年中頃まで林野城に住んでいた。

その後、一旦妻子と共に備中庭瀬に退去していて、江戸に上り、妻お福は竹千代君（後の家光）の乳人（ちちびと）として徳川家に仕え、世に春日の局の名を残し、その一族の者は大名や老中に取り立てられたのである。

彼女が乳母になれたのは、親交のあった堺の商人、今井宗薫の推薦と言う説、板倉勝重の推薦と言う説、夫の稲葉政通が関ヶ原の戦いで手柄を立てたからだと言う説などがある。そして目出度く家光の乳母となった彼女が権勢を奮うようになったのは、彼女が半生を家光に捧げ、献身的に尽くしたからだった。そして家光が将軍になれるよう、家康に直訴したと言われている。それに家光が天然痘を患ったときには「自分は一生涯薬を断つかわりに救って欲しい」と神に祈り、その薬断ちの誓いを死ぬまで守り通したと言われ、それ程までに尽くした春日の局に対して、将軍家光は厚く報いたのである。

【歴史の意外な伝説より】

老いのたわ言

吉政　實夫

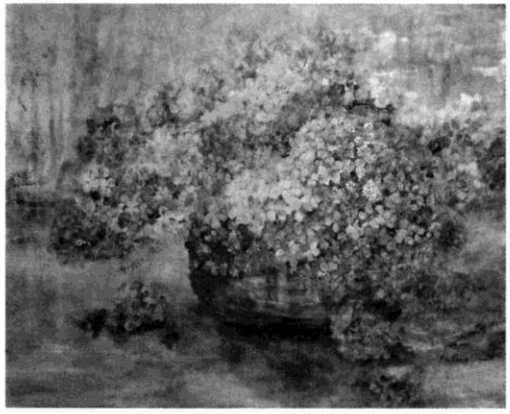
昭和二十五年から三十年頃、秋の穫り入れ時期がくると、和田屋の爺さんとも旦那さんともよばれていた上品な人が、昔話好きでたくさんしてくれました。

土居とは、読んで字の如し、縄文、弥生の時代から人が住んでいた。現在の稲荷山から本典寺上付近に、横穴式の集落があり、当時は野獣の攻撃を恐れて高地に住み、狩と農耕で生計をたてていた。次第に文化も進み、出雲や大和の人々と交流が始まり、出入りする人も多くなった。

世代は流れて、戦国時代となり、山上の集落は、平地におろされ、豆城下町が形づくられ、上町、中町、新町、裏町と道幅も広く、現在に通じるものである。また集落の跡地は、一周二百米位の馬場がつくられ、現在の運動公園は、それを拡張したもので、集落の跡形もなく壊され、その後、平和も続かず、山城は落城。

江戸時代となり、人馬の往来が多く、幕府は、国境に関所がおかれ、天領となり、一時は代官所もおかれ、町は栄えに栄え、西国大名の宿泊所もでき、人口も増加し、食料、資材の商いをする人、役所関係の人、本陣・脇本陣の常雇いの人等で、にぎわいの田舎町土居の里の出現であった。当時のざれ歌に「田舎なれども土居町ちゃ　名所如何な大名　土居泊り」と歌われていた。当時の人口は、現在の三倍だったそうだ。出雲街道土居の宿には、本陣とかめい屋と和田屋

という二ヶ所の脇本陣があった。
明治になってから、和田屋は大阪方面に屋越しをしたそうだ。
毎度のことながら、老いのたわ言を並べました。

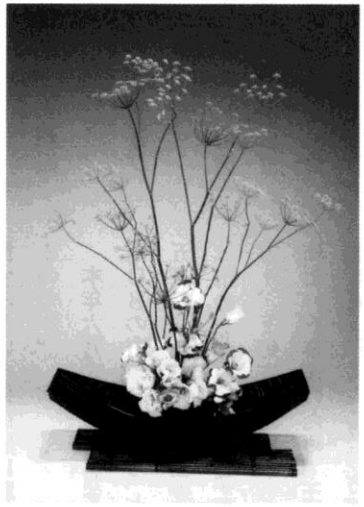


洋画　春　名　勝　江

ふるさと発見

ふるさとの先人が
築きあげてきた諸々のものを
見つめなおそう

発見・発掘しよう
伝承しよう



生花　大　倉　淑　子

土居宿界隈の活性化に向けて
―今こそ地区民の結集を―

春名正昭

過疎化になかなか歯止めのかからない現状、これから我が郷土はどうなるんだろう?と不安視する人が多いのではないでしょうか。

このきびしい現実の中、昨年八月九日夜、当地方を襲った集中豪雨は、未曾有の甚大な爪跡を残し、当地区内も大変な被害となりました。被災された方々に改めてお見舞申し上げます。計り知れないショックと辛苦を受けられながら、よく困難を克服され、復旧につとめられました。近隣や地区の方々の協力、更には全国各地から馳せ参じて下さったボランティアの方々の温かいお助けもあって立派に立ち直られました。

「助け合い、励まし合い」の心が如何に大事かを思い知ったのでした。

河川の氾濫は民家や田畑にも及び、荒廃しました。

私たちが保全に気を配っている旧出雲街道自然の道も、流水による道路の荒れ、山肌の崩落など通り抜けができなくなりました。

しかし、幸いにも市の関連工事に加えていただき、九月に入って間もなく開通、路面の整備は会員の出動によって復旧できました。

文化誌第三三号にすでに拙文にて述べましたが、旧出雲街道土居の自然の道は、延長約八〇〇米、全国でもこれほど長く続いている古道は珍しいと言われています。それだけに私たちが力を入れ、誇れる道として整備するという使命感に駆り立てているのです。

本年六月末には、NHK(岡山放送局OBの方二名)から、七月に入り、五班に分れて阪神方面から、初旬には市教委募集の生涯学習受講生の方々、下旬には勝山から出雲街道作州編作成準備のため、三名の方が来訪されました。阪神方面の五組の方々は、播州(上月側)から萬ノ畝を越え、ウォーキングを兼ねた歴史探訪でした。梅香塚、安東鐵馬碑、四ツ塚をはじめ、土居宿内の旧跡を散策されて西惣門までというコースでありました。

宿場内の家並みの面影を想像するには、いささか期待はずれの感はあったと思いますが、名所、旧跡等の標柱や東西に設置した案内看板が往時を偲ぶ一助になったと感じました。

今後も当地を訪ねてくださる歴史愛好家やウォーキングを楽しまれる来訪者の期待に背かないよう地道に活動を続けていきたいと思っています。

会員の協力と地区各位の力添えを願っています。

各地区、地域において、文化的財産(有形・無形)を保持し、伝承のために骨を折っておられます。旧作東町内に目を向けると粟井地区の春日歌舞伎、宮原地区の獅子舞など次代へ繋げる取組みに頭が下がります。近くでは、地域活性化で功を奏している〝とらちゃん田圃〟。荒れた田畑を利用しての〝花作り(山城地区の百日草)〟。本年度から始まろうとする旧英田町上山地区の棚田の復活。大原地区の本陣をはじめとする多くの民家の雛祭りなど数えきれないほどの催しは、その地その地の特異性と共に知恵をしぼった取組みで行われています。私の地元においても、以前計画されていた出雲土居宿太鼓(仮称)の発起を願っています。

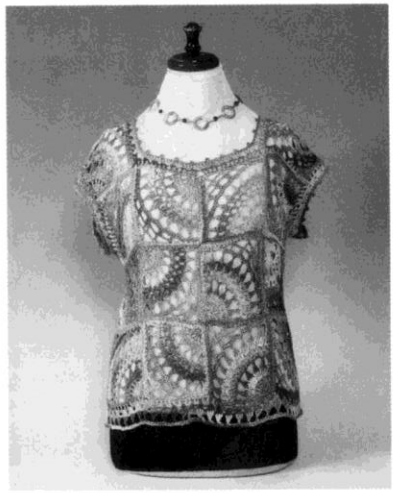
町の活性化に向けた方法は、幾らでもあると考えます。垣根を越えて地区の皆様、特に若い方々のやる気、更には世の体験者―年輩の方を含めた英知と協力が必要です。

本年三月、市内稲穂の絵本作家安藤由紀子さんが〝土居宿物語〟を発刊されました。すでにご覧になった方もおありと思います。大変判り易く、歴史的考察にもよい本だと存じます。

大事な郷土を守り、次代に繋げるため、更なる結集をお願い申し上げます。

短文芸

生きている
あかしとしての
　自分の思いを
自分の言葉で
　表現する
その表現が
　万人の魂を
　　ゆり動かす
短文芸の力
　伝統文化の力



手芸　小林弘子

詩

ちぎり絵　鳥形紀恵

同窓会

坂部金治

光陰矢の如く　学窓をいでて
　五拾有餘年
老て日毎に募る郷愁の念
旧来の念願今此処に成りて
　同窓一場に会す
歓喜躍動して胸襟を開き
　往時を偲びて童心に帰る
既に亡友幾人か
　懐旧の情切成りて
来天の霊来りて受けられよ

俳句

押花　津田次恵

田植ゑ

春名静山

一枚の田に一人づつ棚田植ゑ
休耕の進む虫喰植田かな
承知してをりしが刺さる茄子の刺
熊除けの鈴売る農協カウンター
門札に添へし俳号つばめ来る

山上の太鼓

江見英雄

自分史を漸くまとめホッとする
亡き父の雨乞祝詞コピーする
暑けれど愛宕の祭典済ましけり

賀状

青山元江

筆太の賀状の寅は勇姿なり
一枚は形見となりし賀状かな
お年玉ひ孫の笑みがこそばゆい
若草の匂いほのかや深呼吸
二病持つ吾に優しき若葉風

四季の和み

真野雅子

憂きことは遠くに流し水温む
亡き友の庭に一輪春の花
脱ぎすてしシャツの重さや大暑なり
旅ごころくすぐり覚す秋日和
北吹くや夜のしじまの軋む音

折々に

杉本幸子（土居）

茶柱の立ちたる朝や柿若葉
梅雨ごもりクロスワードに熱中す
一塵の風に転がる夏帽子
夏座敷火照り残れり夜更けても
暁け染むる寝返りばかり熱帯夜

パリの秋

下山紀子

宮殿を一周したる秋日傘
夏帽子凱旋門をくぐり来し
似顔絵師吾に付き来るパリの秋
モナリザに逢ひ秋愁を深めけり
夕月をエッフェル塔に仰ぎけり

花菖蒲

樽井清江

稚児の列匂い乗せくる若葉風
風に聞く山百合の香は草の中
大夕立わき出す湯気や匂う土
束ねたる友のたよりや花菖蒲
芋の葉を巧みに揺らす風のあり

山幾重

沖田はるみ

天地の息吹清らや初あかり
悉くしべの桜となりにけり
朝もやの郭公ひとつ山幾重
一番星風に波なす穂草かな
銀の嶺々へ冬月しろく照り

青嵐

春名はるを

島影に消ゆるタンカー春浅し
水害の岸に今年の蕗の薹
畑返す鍬の重さを覚えけり
青嵐口は悪いがいい先生
霧(きり)襖(ぶすま)ほどけて峡の古刹浮く

棚田

加藤美雪

向日葵や我背丈より高々と
念願の眼の手術すみ青葉眼に
蜜蜂が花から花へ休みなく
キャベツ畑蝶戯むれて気になりし
棚田まで田植機入り人手なし

初鏡

山本靖子

初鏡眉引く手にも決意あり
夜寒し頭をめぐる子等のこと
介護士と歩く老女の木の芽道
かなかなに追われて進む農作業
秋深し杖つく姉の先案じ

枯蓮

髙橋やえ子

ゴム飛びの子の声ひびく春の風
立春や一樹一草空を刺す
はんなりと夢二語るや紅椿
キルト縫ふ月夜の兎弾ませて
枯蓮のくの字に折れる不安かな

山津波

山下照夫

一瞬の地鳴り響きて地獄絵に
山津波多くの友を呑み込めり
そっと触る君が手足の冷たくて
土砂埋まる荒田の中に野菊咲き
ようやくに復旧工事玉の汗

青葉

樽井悦子

お早ようと眺める山の青葉かな
新宅にまねかれ山の青葉かな
瀬戸の海若葉輝き舟進む
友よりの花一輪の押し葉かな
水引きの紅白ゆれて庭せまし

秋風

井口秀子

初日記開けて今年の匂い嗅ぐ
髪梳けば秋風に蝶のまい出でぬ
さんま焼く匂いに猫の歩を止める
みそに煮てうまき秋鯖買いもどる
曼珠沙華だらだら坂を下りて行く

山百合

森本久子

青葉こく夕立風の音さわぐ
朝影の草にしみいる迷う蝶
夕月や露の光りし夜の道
満月を浮れて咲きし月見草
山百合の場所に迷いし崖に咲く

書初

坂部金治

書初や心魂込て握る筆
残り柿梢が揺て成る烏
打撲跡又蘇る木の芽立
山若葉車窓に流る連休日
防鳥の稲田にテープ風に鳴る

朝の風

山本登山

風花や峡は静もり居ておりぬ
藤の花観光バスは房ゆらす
植田跡眺め煙草のながながと
笹百合の匂持ち込む朝の風
花野中転びて雲に話しかけ

川柳

写真　安田　隆

親友

山本　章（遺稿）

玉音放送あの日も碧い空だった
偉い人よりやさしい人になってくれ
あの海に沈んだ戦友（とも）よ蝉しぐれ
親友の肩をも叩く管理職
またひとり人生ドラマ負って逝く

ふるさと

遠藤　榮

早苗田に日焼けの父の影揺れる
よそ行きの白いエプロン母の顔
夢に見た初恋の彼若いまま
母書いた詩（うた）は子等へのメッセージ
元気です日記に書いて墓参り

汗

山本昌子

あの世まで続く道です日々の汗
のどごしの音もさわやか汗が引く
五線紙に汗の詩組む山の家
寡婦ゆえに汗と偽り拭く涙
宅配便汗の臭いがころび出る

旅

太田智子

振り出しに戻れぬ旅にある未練
残された田畑を担ぐ丸い背な
甘い日も苦い日もあるお茶の味
二つ知り一つ忘れて老いの日々
一善を積んで心の貯金する

卒寿の目

山本登山

針の穴糸の通せる卒寿の目
サヨナラのチャンス代打の花咲かせ
又来いと抱けば母乳の匂いする
丸書いて中丸三ッツでパパの顔
古い帯今はペットのチャンチャンコ

昭和史

春名静山

昭和史のおぼろとなってゆく大平
一匹狼だから気侭に生きられる
怒る程言葉荒げる反抗期
騒がれているうちがよい青春期
二人の秘密ポストだけが知っている

借金苦

山下照夫

国債は増えるが議員笑い顔
普天間の片付かずして秋となり
マニフェスト期待外れで情なや
投票に行けど書く人無く口惜し
金美女の訪日あれどやや遅し

春夏秋冬

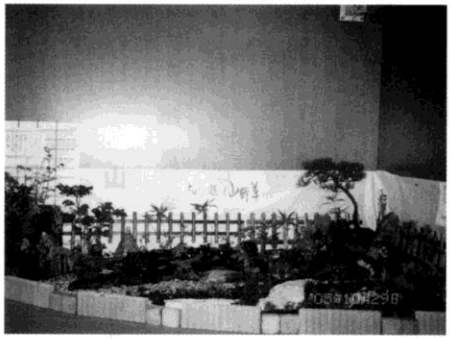
原　洋一

声上げて一気に越える春の川
句読点ばかり打ってる夏の空
命つなぎゆっくり登る秋の山
いくつもの訣(わかれ)をまとい冬と居る
春夏秋冬楽しまなくちゃ四コマ目

ちぎり絵　大崎安江

ちぎり絵　道信英子

短歌



山野草　会員合同作品

大津皇子よ

三浦　智江子

俤におびかれて来て君の起つ天二上を近く仰ぎみる

盧(いほ)くらく待ちゐしかげの渡る夜か「わが配偶(つま)に来よ」と耳にきこゆる

大人にはもう縛られぬ胸大き君が許へと今ぞ走らむ

面倒なのは

入矢　敏江

面倒を見やることなき糸とんぼ不意に浮きたち去りて子のごと

どのやうにいつどこで言ふ丸めてはまたこねてゐる言葉と団子

余つても足りなくつても揉めるもと面倒なのは言葉か人か

老い母

加百　由起子

世話になるはこの夏からと母はまた看取りし五年を空白にする

健康をわたしに下さいあと十年百まで生きると母が言ひます

「ありがたう世話になるなあ」母は日に何度言ふだらう娘の我に

涙流しき

黒石　貞子

かの夏を思ひ出すさへ悲しかり大連の街に一人放り出されき

青雲台にママを思ひて泣いてゐしロシヤの兵も十八なりき

日本の土だと言ひき佐世保へのわが第一歩に涙流しき

「入鹿」の居直り

加藤　芳英

飛鳥より筋交ひ道を斑鳩へ馬を駆るかや太子の幻

飛鳥なる真神原に埋るのは権力めぐり流せし血しぶき

計りごと始めは馬子の寺の庭「入鹿首塚」そこに居直る

雨の病室

加藤　幸子

こんな日には待ってるだろうと夫が来てパン分けあえり雨の病室

無理するな無理をするなと言う夫が朝の味噌汁早よ炊けと言う

久びさに旅寝の夫が掛けてくる戸締まりしたか早く寝ろよと

水害

春名静山

子の帰農待ちつつ朝の風受けて腰の痛みに耐えて草刈る

鉱石を運びし鉄路今は無くサイクリングの道となりおり

遠近(おちこち)の田に水害の芥(ごみ)を焼く煙棚引く秋の夕暮

幼き人等

江見英雄

亡き母はすべての事に愚痴言はず独りで堪へて暮し居りたり

園児等と交歓楽しき万の台憩の森は思ひ出にこそ

上方より五台のバスを差し向けて昔の道を探りて行けり

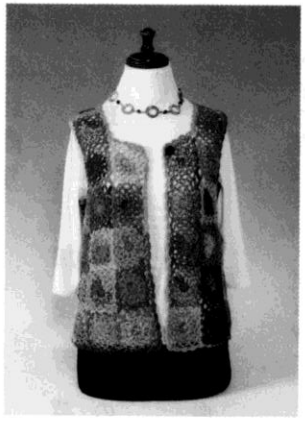
老ゆる

杉本幸子（土居）

昨日春今日また冬の寒暖差ついてはゆけぬ老ゆる身なれば

水害に遭いたる時より七つ八つ一度に老けし想いの日々よ

病室の窓より見ゆる黄昏の樹々の枝葉に雀群がる



手芸　田中　富美子

山里に生きて

安東奈穂子

ちっちっとつつじの葉かげに啄める稚(わか)き雀よ曾孫のごとし

梅雨晴れの夕べをひぐらし鳴き出して山の青葉がひとしほ輝く

畦草を刈る手を止めて話する笑顔の老人夕日がつつむ

小屋の屋根

坂部金治

小屋の屋根寒風受けつつ改造せんと鋲打つトタンに指がかじかむ

サーキット空震わせて音流る耳立てて聞くは昼はぐれ鹿

岡の上ぽつりと立ちし警鐘台今も現役村見守りて

スポーツ

山下照夫

参加して四半世紀は夢の如何時まで続くや武蔵ロードは

障害を乗り越えここに金メダル祖父の安堵は我が事の如し

悲願なる女子駅伝に優勝し岡山女子の力は天下に

孝行

井口秀子

我が村は過疎にはならじ若者の神輿を担ぐ声の響きよ

菜種殻で祖父の作りし箒にて蛍を追いし幼日想う

母の愛知らずに育ちし老い我は海より深き娘の愛に涙す

芽吹く

豊田絢子

梅馬酔木桜に辛夷つつじ咲き福山の里に木は芽吹きくる

朝日さし芽ぶきの遅き木木の間に白き辛夷は眩しかりけり

庭一面にみどりの若芽散乱す一夜を荒れし春の嵐に

オリンピック

山下三代子

幾度もおこりしハプニング乗り越えし高橋選手の栄光への道

冬枯れに南天の実のみ赤々と照り輝くを部屋に生けをり

子供の日を我に見よとて鯉幟村吹く風をはらみて泳ぐ

癒されつつ

松本哲夫

我が畑に白きみかんの花が咲き香り立つれば蜜求めくる蜂

栗の木に接木をするを趣味として幾年生くるか妻に笑はれつつ

散歩する犬と後追ふ飼猫が共にじやれあひ我を癒すも

田舎に住みて

松井洋子

新墓が道辺に建ちて朝(あした)より田植ゑする我らを見守り呉れぬ

父母亡きあと山椒の実を今年また採りて出荷の行事終へたり

残業せし息子が遅く食卓に花束置きぬ鮮やかなるを

傘寿の祝

横山美恵子

青空に筆書きに似たる白線二本ぷくぷく輪になり青に溶け入る

母と夫の法要終へて皆去りぬ遺影の前に黙して独り

「いつまでも母さん元気で居てね」とて傘寿の祝の電気製品

ふるさと

宿野和穂

七十年一度も逢はざる八重ちゃんが街に住みゐて「ふるさと」を書く

「ふるさとは遠くにありて」と知りをれど古里江見より出でざるままに

来年も同窓会を待つといふ友の多くは街に住みをり

添ひをれば

新免三代

病む夫の出す足一歩に添ひをれば息をするさへ忘れてゐたり

耳遠くなりたる犬の背に触れて餌を知らせれば摩り寄りてくる

六十余年ハンドル握りて走りしが乗せてもらへば酔ふとふてる夫

写真　井口満春

わが田

新田千晶

田の中に夫の走らす耕耘機にて幾何学模様を描き
出しをり
水張りしわが田に映る村山のみどりの濃さよ細波
立たず
採算の合はぬことをば知りながら今年も夫は作る
か米を

黄泉の国

原田順子

日帰りが出来るものなら黄泉の国に夫の好物持ち
て行かむに
黄泉の国に日帰りせずともそのまんま泊り来れば
と娘は言ふなり
黄泉にても綺麗どころの二・三人侍らし居るや御
自由に夫よ

タケちゃんの声

有元理嘉子

「リカちゃん」と幼名呼ばるその声はニュージー
ランドの「タケちゃんの声」
夕日受け山道下るトラックは京へ急ぎぬわが蕪乗
せ
亡き夫と夢に会ひしは煙草畑風に痛みし煙草取り
をり

夫の縁（よすが）

岩本敏子

リハビリの装具も靴も捨てがたく下駄箱にあり夫
の縁（よすが）と
あの世には障害持つは居らぬと聞くわが行けば夫
は名を呼びくるるや
刻告ぐる「夕焼けこやけ」のチャイム鳴り独りの
夕餉の仕度にかかる

果てしなき青

小林洋子

機上にて見放くる彼方果てしなく青青として青澄
むばかり
明けやらぬ刻を出で行く息子らよ待ちたる天魚の
解禁の日を
糸桜夫と愛でたる想ひ出をまたもや花は置き去り
にせり

看取り

横山昌子

年少にて母を亡くせし夫ゆゑか母に甘ゆる如くに
われ待つ
病める祖母を看取る為にと嫁ぎ来て舅も看取りて
今夫を看る
老い夫が世話になつたなお前には済まぬ済まぬと
真顔で言へり

夏の夕暮

安西苑

雨の中一羽の白鷺畦道を行きつ戻りつ餌をさがす
のか
わが村の穂ばらむ青田を渡り来て暑き風吹く夏の
夕暮
秋あかね空に溢れてとびをれば夏は再び戻りては
来ず

笑顔

藤川亜也

愛犬と走り行く少女の「おはよう」とはじける笑
顔は今日の太陽
豊作の玉葱ずらりと吊し終へ食は安全家族の笑顔
連休も娯楽もなくて農われは刈りあと眺めてスト
レス解消す

また仕舞ふ我

清田　三智子

椅子を台に目線を合はせ曾孫は金魚に言ひをりおいしいかいと
空を見上げ日和を願へばあちこちの音の世界が蝉になりをり
三年を着ざれば捨てよと言ふテレビ片付けむとしてまた仕舞ふ我

孫は合格

横林　冨砂子

犬の散歩に行く道の辺に桜の木見上ぐればほんのりふくらみ居りぬ
庭に咲く低き梅の木白白と咲き満ちてをり孫は合格
ひな壇に色とりどりの人形あり日本の伝統は子供に夢を

友と約して

原　幸子

新春の顔見せだけに帰り来し子らと語らふ一夜なれども
黄色なる柚の香りを友のもと運びて共にゼリーを作らん
如月の風は肌身にしみ込みぬ友と約して荒神の宮

盆栽　青山　巌

川の流れに

野沢　老梅

生れし地のめだかすくひし川の音あの日のままの歌かなでゐるや
大洪水に小魚いづこでよどみしかもとの流れに銀鱗映えをり
裏の川は子守唄なる夜もあれど大雨予報に怒声と化りたり

さあ行かう

池田　保子

明治より歌ひ継がれし「茶つみ」うた手合はせで伝へむ粟倉の児らへ
通学路に声弾まする学童よ夏の思ひ出かばんに詰めて
さあ行かう児童らが待つ「土居小」へ心引き締めハンドル握る

日常のこと

大内　佐智

お日様の恵みの少なき畑に立ち大きくなれよとトマトに声遣る
紫のつけ爪のごとき詰めし指やや華やぐをそろりと扱ふ
関節のうづきの重さ量りをり温さ寒さをバロメーターに

能登香の春

内藤　慶子

横田坂を登り下りし十八年能登香の里を巣立ちゆく孫
巣立ちゆく孫に向けたる言葉あり「いちょうの木になれ庭木になるな」と
旅立ちの春巡りきて万葉に詠まれし能登香の山をあとにす

曾孫

光井房子

十か月伝ひ歩きも身について一歩はいつ出る曾孫よ一歩は

女孫にと祝ひし七段の飾りびな三十年経て曾孫の初びなとなる

目をあけてきよろりきよろりと思案顔泣かうか泣くまいか曾孫はしかめ顔

贈り物

鳥形節子

朝早く父母にと届く贈り物愛の心に嬉し涙す

晴の日に優しき友と集ひ合ひ語る笑顔は一日のよろこび

庭に咲くつつじの花を老い夫と眺めてをりぬ語らひ乍ら

いとうつくしき

藤本伸子

悶えの子晶子の逝きて六十年白桜忌今日我静かなり

ひとひらの小さく舞ふがに白冴ゆる姿なりけり鷺草の花

亡き母の齢となりて古稀近し夢に見る母いとうつくしき

蜻蛉舞ふ

森本久子

堅田なる小川の音も爽やかに押し車の手に蜻蛉舞ひ来る

冬の空ねむれぬ我に月明かり飛行機の音も遠く消えゆく

外は雪ストーブが友の老の身も甘酒飲めば動く心に

師の声

名部みどり

受話器より師の声低く流れ来て迷ひし固まり溶けて消えゆく

読み終りし新聞紙たたみて底に敷き地下足袋ぬくし凍てし田に出る

学びたき夢多かりし少女子の戦ひの日は還ることなし

夏来たる

井上さかゑ

花の色木の葉のみどり冴えわたる長雨の去りし日の明るさに

青き葉に日を躍らせて真盛れるカンナの花は燃ゆるがごとし

板の間の素足の感触ここちよくるるんるんるん掃除機かける

孫の結婚

阿部すみゑ

幼より手がけし孫の晴れの婚夢とも秘めつつ永らへをりて

粛粛とバージンロードに父と立つ膝にむづかりゐし大祐が

新郎の親なる席の父と母泪うるませつつましかりけり

燃ゆる夏

末宗千歳

幼らは庭一杯に笑ひの種をまくかこの炎暑ものともせずに

デデッポウの声に励まされ杖をたよりに野菜畑を見まはる吾ぞ

夫と並びてうたの小径を巡りをり半月白きバレンタインの里

老いの幸せ

加藤保子

あちこちの桜の便り聞きながら吾は畑に春の種蒔く

えんがはのガラスを黄に染めながら弥生の満月今のぼらむとす

吾がことのできる幸せを思ひつつ今日も静かに独りの夕餉

水禍

船曳文子

一足のみ遺して置きゐし夫の靴何処に在りや洪水に流さる

夫逝きて惰性に過しし十余年頼ぶたれしかこの大洪水に

トイレ借り貰ひ風呂せし百日余やうやく水害に終止符を打つ

黄の蝶

北村和子

米俵六十瓩を軽がると担ぎし夫よ若かりし日よ

わが体思ひのままにはならねども生かされゐるを悦びとせむ

黄の蝶は縺れもつれてコスモスの群れ咲く中へと姿を消しぬ

秋

福島美智子

住職は汗を拭きつつ経あげて秋の彼岸の檀家をまはる

抜けるやうな青空ひろごりその下に夫と二人の稲刈りをする

嫁がせて留袖たたむ秋の日は何故か時間がゆつくり流れる

川の面

角南三津ゑ

釣り好きの夫の面影偲びつつ夕日に輝く川面を追ひ行く

水際を泳げる魚の影追ひて川面に跳ぬるを癒しにせむか

雪解けの淡く濁れる川の面を白鷺群れて北に南に

豪雨の去りて

中川冨美枝

水害の炊き出しおにぎり噛みしめぬ夕べの恐さ思ひ出しつつ

こぼれたる涙がはらりとまぎれゆく水害あとの埃の中に

疲れはてて気力も失せつつ土石流に傷みしアルバム乾かしてをり

旅の思ひ出

長澤和枝

父が望み靖国神社へ参りしよ娘の四人が付き添ふ気分に

背を正し靖国神社の大鳥居をくぐりし父の健やかなりき

戦死者を拝みて気持を納めしと言ひにし父よ目裏にあり

山野草　加百　よし子

我も老いたり

角　利津

わが暮し詠まむとすればその度に老いの繰り言繰り返すのみ

わが歌とわが書の集成思へども危ふきかなや病ひ持つ身は

わが生をよろこび呉るる者の居る限りは生きむと今朝も米磨ぐ

今しばし

日下　智加枝

雲の間をひとすぢくだる日のひかり吸はれるやうに白鷺がゆく

雑木林の霧氷が朝日にかがやける前世後世を私は知らぬ

今しばし出来得ることありいつしかに乾燥剤はとけてゆけども

伊勢の神宮

浜田　くに子

静かにも伊勢の森より流れくる五十鈴の川の水うつくしき

人間はかくも平身出来るのか神に額突く神官美し

神楽舞ふ袖より真すぐにのぞきたる指先が確と乙女なりけり

弟

黒石　登代

われよりも若きはらから葬り終へ皓皓たる月の下を帰り来

逝きし人の部屋に残せる背競べの印は五人の孫の記録ぞ

ふるさとに帰る体力無きを告げし弟は自在か魂となる今

夫と娘と

徳野　富美子

青葉の下背を見するは青年と思ひし一瞬振り向くは夫

無口なる夫の態度で覚えしや仕事の厳しさ子は口にせず

世渡りのうましと思へし末の子は我の側より飛び立てずをり

生ありて

釜田　玉枝

姑を言ひつつ夫と柚子刻み味噌と練りあぐ香につつまれて

古稀すぎて同窓会の通知ありどの服どの靴どの指輪にせむ

目薬の一滴新緑うつしけり疲れし瞳を癒してくれよ

限界集落

江見　眞智子

シャキシャキと千六本に新玉葱きざみてためす包丁の切れ味

大空を背にして咲ける朴の花限界集落制覇せしがに

ふところに飛び込みしがに鶯の真近に鳴くを今日の友とす

達成感

川崎　晃

養生学会の研究発表の要請をことわりきれず度胸きめたり

講演の準備の数か月二十数冊の書籍に目を通し自信を得たり

達成感覚えたりけり講演の終りに二回の拍手を受けて

現実

坂井　はつ子

納税期を切り抜けたれば梅が香をほのかに覚ゆる
我に戻るも

「暴れん坊将軍吉宗」が白鷺城を借景してより幾
年月ぞ

マラソンの先導車放送車の排気ガスにかこまれて
先頭ランナーがゆく

降る雨に

関内　惇

昨夜(きぞ)よりの雨に櫟の梢(うれ)はやく芽吹き初めたり遅れ
はせぬぞと

とがり芽にやはらかき雨を受けながら山芍薬は赤
光と化(な)る

ほつほつとあを芽を見する柿の木を雨が叩くを叱
咤とも見つ

織物　小坂田　　文

平成21年度　作東文化協会事業報告 1

【全 体 事 業】

年	月	日	事業名	内容
21	3	22	作東文化協会総会	バレンタインプラザ
	4	8	第１回理事会	事業計画、会員募集、研修旅行、文化誌編集委員会について
	5	1	文化誌編集委員会	編集委員長選任、編集方針について　以降３回開催
	5	29	第２回理事会	研修旅行、文化誌原稿募集、秋の文化展について
	5	29	会員募集開始	会員募集
	6	5	"文芸愛の小径"設置委員会	下書きの点検、清書の提出と代金納入について　以降２回開催
	7	19	研修旅行	兵庫県　城崎、出石方面
	9	18	第３回理事会	秋の文化展豪雨災害のため中止を決定
	10	9	文化誌35号発刊	全会員に配布
22	1	22	第４回理事会	春の文化展、芸能発表会、総会について
	3	12	第５回理事会	総会について
	3	27	春の文化展	農村環境改善センター、作東美術館、バレンタインプラザ　～28日
	3	28	文化発表会	バレンタインプラザ(芸能部)

【専門部・支部活動】

年	月	日	部名	内容
21	6	17	江見・豊野支部	江見･豊野合同評議員会
	6	17	土居支部	土居支部評議員会
22	2	25	福山支部	福山支部評議員会
21	4	19	粟井支部	作品展示(温泉まつりの大広間)
	6	3		粟井支部評議員会
	10	10		春日歌舞伎公演　～11日
	6	11	吉野支部	吉野支部評議員会
	9	4		吉野支部評議員会
	10	19		吉野支部評議員会
	11	15		吉野支部研修旅行(出石･鳥取方面)
22	2	26		吉野支部評議員会
	1	8	書道部	白雲書道会／白雲書道会展　作東美術館特別展室　～10日
21	5	2	絵画部	油彩･水彩／春の絵画展(神戸･岡山交流展)　作東美術館常設展室　～６日
	5			岡山県展、しんわ展･バレンタイン愛の美術展、勝山いいとこみつけた展
	12	1		神戸･岡山交流展(神戸にて)
	3			日本画／玄美会展(勝央美術文学館)、反省会(プラザホテル)
22	2	23		さつき会作品展　作東美術館特別展室　～28日、日本美術院展(岡山天満屋)
21	9			水墨画／土居小学校多目的ホール展示
	11	3		佛画･俳画／公民館展示、作東春展示会、プラザ東側展示
	4			絵手紙／プラザ東側展示、土居小学校多目的ホール展示、きんちゃい館展示
22	2			美作市東吉田宝妙寺展示(２月、５月)
21	4	11	園芸部	山野草／寄せ植え講習会、コケ玉作り講習会、鉢作り講習会等(きんちゃい館)
	4	25		全国都市緑化フェアー参加(西大寺)　～26日
	4	29		寝屋川市、愛媛県大保木地区との交流会
	6	19		県北山野草展へ出品、津山信用金庫美作支店にて手仕事展出品
	4	25		盆栽／盆栽研究会(講師　白鷺園主)、総会及び研修会(ファーマーズ)
	10	24		秋の盆栽展(勝央合同、ファーマーズ)、研修会(奈義町会場、講師　白鷺園主)
	10		文芸部	短歌／プラザ東側展示(２回)
	4		写真部	反省会･例会･デジタル撮影について、蒜山高原撮影会
	8			バレンタインプラザ東側展示
	11			津黒渓谷撮影会、山陰海岸撮影会
	10		芸能部	芸能部役員会(年３回)
22	3	28		第５回作東文化協会芸能発表会

平成21年度　作東文化協会事業報告 2

年	月	日	部名	内容
21	4	18	工芸部	押花／押花合同作品展＆体験会(ファーマーズ)　～19日
	11	6		合同野外学習　姫路方面(好古園、加西フラワーパーク)
	5	18		山の幸染め／おかやま緑化フェスティバル展示、体験教室　～22日
	10	10		きんちゃい館体験教室、山の幸染め作品展＆体験会(ファーマーズ)　～18日
	11	6		合同野外学習　姫路方面(好古園、加西フラワーパーク)
22	1	8		押絵／土居小学校へ展示
21	5	10	棋道部	双山囲碁大会　年３回、姫路城下町囲碁大会(姫路市幸通り)
	5	9	手芸部	春の手仕事展(きんちゃい館)
	11	20		秋の手仕事展(美作市豊国原)
	9	12		手織ファッションショー(きんちゃい館)
22	2	26		はたおり講習会(芳野小学校)
	3	13		間伐材再利用作品展(きんちゃい館)
	3	21		作東文化展出品
通年事業			書道部	白雲書道会／作東公民館　里見明先生宅　月２～３回
				阿部書道会／阿部雲魚先生宅　月２回
			絵画部	油彩･水彩／改善センター　月１～２回
				日本画／作東公民館　月２回　9:30～
				水墨画･佛画･俳画／ＪＡ勝英作東支店土居営業所　月２回
				絵手紙／作東公民館他　月１回
			園芸部	山野草／きんちゃい館等　年17回
				盆栽／ファーマーズ等
			茶華道部	茶道／作東公民館、長家宅　月２～３回
				華道／作東公民館(研修後展示)　第１･第３土曜日、福山公民館　月１回(12月で解散)
			文芸部	短歌／作東公民館、作東老人福祉センター、吉野公民館　月１回、新聞発表(毎月)
				川柳／偶数月　第２水曜日　例会　新聞発表　俳句／月１回　英語／月４回
			歴史部	歴史地名研究会／作東公民館等　月１回
				古文書を読む会Ⅰ･Ⅱ／作東総合支所会議室　月１回
			写真部	撮影･反省会
			芸能部	吉野ハビネス、琴伝流大正琴あずさの会、早渕流剣詩舞道、作東吟詠愛好会、コール作東、舞踊の会／月１～６回
			工芸部	ちぎり絵／月１～２回、山の学校展示(毎月)
				押花／ＪＡ勝英作東支店　月１回
				山の幸染め／小房コミュニティハウス　月１回
				押絵／横林集会所　月２回
				たんぽぽ工房／旧吉野幼稚園　月１～２回
			棋道部	囲碁交流会／教育集会所　毎週月曜日
				美作市囲碁連盟／お好み囲碁対局、子ども囲碁教室、高齢者囲碁教室
			情報映像部	インターネット･パソコン年賀状講座／第１･第３木曜日　オンライン学習　随時
			手芸部	編物／作東公民館　月４回　ビーズ／作東公民館　月１回

【連 盟 事 業】

年	月	日	事業名	内容
21	6	21	美作市文化連盟文化祭第２回芸能発表会	英田公民館
	6	28	美作市囲碁大会	美作市囲碁連盟／改善センター　年２回
	11	15	第３回美作市吟剣詩舞道連盟発表会	大原公民館

作東文化協会　グループ紹介

部名		グループ名	種別	代表者名	指導者名	例会	場所	展示会等	作東文化協会会員 作東地区内	作東地区外	作東文化協会未加入者	合計
									人	人	人	人
書道部	1	白雲書道会	書道	北村福作	里見明	月2~3回	作東公民館 里見明先生宅	1月　白雲書道会展	23	10		33
	2	阿部書道会	書道	真野みよ子	阿部正登(雲魚)	月1回	岡山市北区伊島町阿部雲魚宅	県北書作家展等	8			8
絵画部	3	作東水彩画教室	水彩画	妹尾美智子	竹中信清	月1回	作東農村環境改善センター	春の絵画展	11	8	2	21
	4	作東油彩画教室	油彩画	妹尾美智子	竹中信清	月2回	作東農村環境改善センター	春の絵画展	10	8		18
	5	こぶしの会	油彩画	田中佳栄子	権田直良	月2回	勝英農業協同組合 作東支店会議室	年1回　作品展	8			8
	6	さつき会	日本画	寺師喜代美	井上美智江	月2回	井上先生宅	年1回　2月に作品展	10			10
	7	墨絵教室	墨絵	小林艶子	岩本敏子	月2回	JA勝英作東支店土居営業所	土居小学校・プラザ	5	1		6
	8	彩の会	絵手紙	木南節子		月1回	作東公民館 瀬戸コミュニティハウス	郵便局(吉野・粟井・土居)、きんちゃい館	7			7
	9	すみれ会(絵手紙)	絵手紙	谷口翠	岩本敏子	月1回	岩本敏子先生宅	プラザ展示、土居小学校展示	7	1		8
	10	吉野ハピネス(絵手紙)	絵手紙	横山富姫	竹内まり子	月2~3回	吉野公民館	美作市東吉田の宝妙寺に於、2月・5月　年2回	5	2		7
園芸部	11	(山野草)園芸部	山野草	加百よし子		年14回	奈義町・きんちゃい館	県北山野草展(奈義町山の駅)	12	1		13
	12	(盆栽)園芸部	盆栽	青山巌	(姫路市)白鷺園園主	年3回	①勝央町ファーマーズ ②奈義町　二宮氏宅	勝央町ファーマーズ展示場	4	9	9	22
茶華道部	13	ひまわりの会	華道	中田敏子	中田敏甫	月2回	作東公民館	月2回　公民館玄関に生花を展示する	13			13
	14	長家社中	茶道	谷本津多江	谷本津多江	月2回	作東公民館	9月　お月見茶会	8			8
文芸部	15	英北短歌会	短歌	横山猛	関内惇	月1回	作東公民館	プラザ展示　2回・きんちゃい館展示　4回 新聞発表　毎月	15	8		23
	16	能登香短歌会	短歌	井上さかゑ	関内惇	月1回	粟井地区センター 又は、教育集会所	バレンタインプラザ　きんちゃい館	15			15
	17	吉野短歌会	短歌	新免三代	関内惇	月1回	吉野公民館	吉野支部文化展・プラザ展示　年2回 きんちゃい館展示　毎月1回・山陽新聞発表　隔月1回	12	2		14
	18	山家川俳句会	俳句	山本登	小島宇人	月1回	福山地区福祉センター	新聞発表　月1回(山陽新聞発表　年12回)	14		1	15
	19	作東川柳同好会	川柳	原洋一	原洋一	年12回	作東総合支所会議室	新聞発表　(年6回)	15			15
	20	Laboこども英語	国際交流	原田郁子	原田郁子	月4回	旧吉野幼稚園(さくら組)	8/22(日)午後2時(予定)～3時半　バレンタインプラザ(ホール)にて、発表会	4		5	9
歴史部	21	歴史地名研究会	地名研究	新田祐之	固定した指導者は、なし。地域の高齢者又は郷土史家	月1回	作東公民館ほか 地域の集会所	展示活動は行わず	20		3	23
	22	古文書を読む会Ⅰ	古文書	山本章	安東靖雄	月1回	作東総合支所会議室	視察研修	11	2		13
	23	古文書を読む会Ⅱ	古文書	山本進一郎	安東靖雄	月1回	作東総合支所会議室		6	3		9

作東文化協会　グループ紹介

部名		グループ名	種別	代表者名	指導者名	例会	場所	展示会等	作東文化協会会員 作東地区内	作東文化協会会員 作東地区外	作東文化協会未加入者	合計
写真部	24	写真同好会写友	写真	小坂田　貢	小玉　司	年4～5回	野外 写真のこだま	兵庫佐用美術展応募・プラザ展示	14人	1人	人	15人
芸能部	25	吉野ハピネス	大正琴	山本宣子	富永仁美	月2回	吉野公民館大広間		11	4		15
	26	琴伝流大正琴あずさの会	大正琴	岩本敏子	藤谷　守	月1～2回	ＪＡ勝英本店	県大会・西日本大会・全国大会・その他近県演奏会参加	6	5		11
	27	早渕流剣詩舞道	剣舞 詩舞	石川八千代	安原鯉舟	月6回	江見公民館		7	1		8
	28	作東吟詠愛好会	吟詠	光辻猛美	衣籏義文 井口敏磨	月2回	作東、土居、吉野公民館 作東老人福祉センター		37	2		39
	29	コール作東	コーラス	池田保子	池田直美	月2～3回	作東公民館		23	1		24
	30	舞踊の会	日本舞踊	井上美智江	溝口樹香	月3回	アトリエ華 作東公民館		7	1		8
工芸部	31	作東がんびの会	ちぎり絵	名部竹夫	名部竹夫	月1回	粟井教育集会所	バレンタインプラザ・作東海洋センター	25			25
	32	江見ちぎり絵教室	ちぎり絵	大崎安江	杉本幸子	月1回	作東公民館		6	2		8
	33	福山ちぎり絵教室	ちぎり絵	青山美和子	杉本幸子	月1回	旧福山地区センター	「山の学校」ロビーへ毎月展示	6			6
	34	フラワー工房JUN (押花教室)	押花	山本淳子	山本淳子	月1回	ＪＡ勝英作東支店 大原コミュニティハウス	ファーマーズ押花合同作品展＆体験会	5	5	28	38
	35	押絵ちぎり絵むつみ会	押絵 ちぎり絵	山本津多江		月2回	白水 横林 原 公民館	土居小学校	7			7
	36	フラワー工房JUN (山の幸染め教室)	染物	山本淳子	山本淳子	月1回	小房コミュニティハウス 大原コミュニティハウス	ファーマーズ山の幸染め合同作品展＆体験会	5	5	28	38
	37	たんぽぽ工房	機織と 手仕事	江見洋子	福原朱美	月2回	旧吉野小あと地にある館 (吉野ふれあいセンターになる予定)	美作市豊国原、展示会 作東吉野きんちゃい館朝市で展示会　3回	10		8	18
棋道部	38	双山囲碁クラブ	囲碁	横山廣志		①月4回 ②年3回	①粟井教育集会所 ②作東老人福祉センター		24		54	78
情報映像部	39	お達者ねっと倶楽部	インターネット	鳥形初美		月2回	粟井地区センター		7			7
手芸部	40	妹尾さと子編物手芸教室	手あみ 各種手芸	妹尾さと子	妹尾さと子	月4回	作東公民館 船曳文子宅		16			16
	41	ビーズを楽しむ会	手芸	妹尾さと子	西坂暁子	月1回	作東公民館		11			11
									470人	82人	138人	690人

編集後記

『作東の文化』第三十六号が会員多数の方々からのご投稿と特別寄稿をいただいて刊行できましたことに編集委員会一同、感謝いたしております。

今年も特別寄稿として朝日新聞岡山柳壇選者の岡田千茶氏と本誌発刊以来寄稿いただいております阿部雲魚氏に加え、今年から顧問として当文化協会にご支援・ご指導を賜っております里見　明氏より玉稿をいただきました。心よりお礼申し上げます。

また、第三十一号で掲載しました「ふるさと発見」の再掲として土居宿を後世にのこす会の活動を掲載しました。

最後になりましたが、本誌の編纂に長年に亘りご活躍され、また、書を題字として第三十一号から本号まで使用させていただいておりました元編集委員長の山本　章氏が八月七日に他界されました。

突然の訃報に接し、編集委員一同、驚きと無念の気持ちで一杯ですが、氏の志を引き継ぎ、今後も本誌の発刊をしたいと考えております。

山本　章氏のご冥福をお祈り申し上げます。

編集委員会

作東の文化

第36号

平成22年10月15日発行

編　集　作東文化協会文化誌編集委員会
（美作市教育委員会　社会教育課）

編集委員　新田　祐之　青山　時弘　安東　靖雄
梅澤　紀之　小林　秀雄　原　洋一

発行所　作東文化協会
岡山県美作市教育委員会　社会教育課内
TEL（0868）72-2900　〒709-4292
HPアドレス　http://bunka.boo.jp/

印刷所　株式会社　廣陽本社
岡山県津山市田町22

作東地域歴史年表

時代	西暦	年号	おもな出来事
縄文時代			町域に人が住みはじめる。
弥生時代			いね作り、はたおりが始まる。
古墳時代	五三八		土器が作られる。
	五九三		青銅器が作られる。
	六四五	大化 一	土師器が出現する。
	六七二	大化 二	鉄器が発達する。
	七〇八	和銅 一	「むら」が発達、族長ができ支配する。
	七一〇	三	巨大な古墳が作られる。
	七一三	六	仏教が伝わる。
	七九四	延暦 一三	聖徳太子が摂政となる。
	八七三	貞観 一五	大化の改新。国司郡司をおく。
	八八九	寛平 一	壬申の乱。
	一一八五	文治 一	和同開珎。この頃高本遺跡に郡衙に附属する建物がつくられる。
	一二〇三	建仁 三	備前の国北部六郡が分かれて美作国となる。
	一二一一	承久 三	奈良に都が遷される。
	一二二七	文永 一	京都に都が遷される。平安時代が始まり神戸市一帯が開発される。
	一二八九	正応 二	貴族の勢力がつよまり武士が発生する。
	一三三三	元弘 三	清和源氏がおこる。
	一三三三	二	後醍醐天皇杉坂峠をへて隠岐に流される。
	一三三四	建武 一	同天皇隠岐を脱出。鎌倉幕府滅ぶ。
	一三三五	二	建武の中興など。
	一三三六	三	後醍醐天皇吉野に行幸。南北朝対立する。
	一三四七	正平 三	作東地域南北抗争の場となる。
	一三五一	六	美作の在郷武士（南党）杉坂に高師泰の軍（北党）を攻める。
	一三五二	真治 一	山名、赤松の抗争始まる。
	一三五三	明徳 三	南北朝合一する。
	一三九四	応永 一	幕府の重臣赤松義則、山名氏追討のため美作に入る。
	一四六七	応仁 一	応仁の乱おこる。（「応仁の時代」）
	一四七一	文明 三	赤松勢粟井庄に進入する。
	一四八〇	一二	英多郡のうち北部六郡が分かれて吉野郡となる。
	一五五二	天文二一	山名氏美作国を支配下におさめる。
	一五七〇	元亀 一	尼子晴久が美作の守護となる。
	一五七二	三	福城主江見帯刀、城を鯰城主江見右衛門太夫にあけ渡す。
	一五七三	天正 一	織田信長、将軍義昭を追放。足利氏滅亡。
	一五七六	四	浦上の将軍草刈景継、粟井高山城を乗っ取る。
	一五七七	五	秀吉上月城を攻める。
	一五七八	六	毛利勢上月城を攻め尼子勝久を自殺させる。
	一五八二	一〇	本能寺の変。美作は宇喜多氏の所領となる。
	一六〇〇	慶長 五	関ヶ原の戦。宇喜多氏滅亡。小早川秀秋美作国を領する。
	一六〇三	八	徳川氏江戸に幕府を開く。森忠政、美作の大守となる。
	一六〇四	九	幕府街道を整備し（出雲、因幡街道、大道）一里塚をおく。
	一六〇九	一四	江見庄大川村を岩辺など十ヶ村に、小川村を土居など八ヶ村に分村する。
	一六一六	元和 二	津山城築城終わる。
	一六二五	寛永 一	森藩は領内に大庄屋（土居大寺氏など五十一人）をおく。
	一六二二	寛文 二	出雲街道土居などに松を植え、松並木を作る。
	一六七四	延宝 一	英多郡を英田郡に改める。
	一六九八	元禄 一	松平長矩、津山に封ぜられる。
	一七〇二	一五	土居代官所を開設する。
	一七三四	享保 一九	はじめて美作国に甘藷を植える。
	一七四四	延享 一	土居代官所廃止となる。
	一七九三	寛政 五	土居万の札に梅香塚の句碑をたてる。
	一七九七	九	小野温湯温泉の入湯はじまる。
	一八〇一	文政 二	文政の国訴。銀納反対で郡内農民代表江戸へ越訴。
	一八五四	安政 一	草刈松人小野に句碑をたてる。
	一八五五	二	江見大火。
	一八五九	六	土居に行余学堂開設。勤王思想広がる。
	一八六〇	万延 一	桜田門の変。
	一八六三	元治 一	蛤御門の変。安東鉄馬戦死。
	一八六五	慶応 一	勤王志士四人土居で自決。
	一八六六	二	美作国内各地に一揆おこる。（改正一揆）由良日正ら身を抵して収拾する。
	一八六七	三	徳川幕府大政奉還。
	一八六八	明治 一	明治維新なる。
	一八七〇	三	平民に姓が許可される。
	一八七一	四	津山に県庁（北条県）が置かれる。
	一八七二	五	戸籍が作られる。（壬申戸籍）
			学制ができ北条県は第五学区となる。
	一八七三	六	明六一揆起る。
	一八七五	八	これより十一年かけて芳英（川崎）境橋（土居）有終（小野）三瀧（小の谷）里仁（万善）水南（白水）成絢（鯰）田原（田原）竹田（竹田）各小学校創立。
	一八七六	九	北条県が廃され岡山県に統合される。
	一八七七	一〇	西南の役おこる。町域戦没者三柱。
	一八八八	二一	町村制の公布により従前の村を大字と改称し数大字を合わせて村とする。
	一八八九	二二	新町村制の施行により町域が江見、土居、豊田、粟井、吉野の五ヶ村となる。
	一八九〇	二三	豊田村の五大字が分割され福山村が誕生する。
	一八九五	二八	日清講和条約成る。町域戦没者三柱。出征七一人。
	一九〇五	三八	日露講和条約成る。町域戦没者三二柱。出征三〇八人。
大正時代	一九一五	大正 四	川崎に組合立江見製糸工場操業を始める。
	一九一八	七	米価一升五〇銭をこえ米騒動おこる。
	一九一九	八	第一次世界大戦おわる。町域戦没者四柱。
	一九二六	一五	英田郡役所廃止される。

時代	西暦	年号	おもな出来事
昭和時代	一九二一	昭和 六	満州事変起こる。町域戦没者六柱。
	一九三四	九	姫新線東津山―江見間開通する。
	一九三六	一一	姫新線全線開通する。
	一九四一	一六	小学校が国民学校となる。
	一九四四	一九	米英両国に宣戦を布告する。
	一九四五	二〇	学童疎開が始まり神戸市一帯越国民学校児童約二〇〇人が江見土居に疎開分宿する。
			ポツダム宣言発表。原爆投下。
			太平洋戦争終わる。町域戦没者五三七柱。
			米軍約四十人土居へ進駐する。
			農地改革が行われる。
	一九四六	二一	日本国憲法が発布される。
	一九四七	二二	新学制により六三制が実施される。
	一九四八	二三	農業協同組合法公布、町域の農業会を農業協同組合に改組する。
	一九五一	二六	江見町養老院開設される。
	一九五三	二八	町村合併法公布され江見町、土居町、福山村、粟井村、吉野村合併して作東町誕生する。
			NHKテレビ放送を開始する。
	一九五八	三三	役場新庁舎成る。一万円札発行される。
	一九六三	三八	中学校を統合し作東中学校誕生する。
			江見商業高校県営に移管される。
			集中豪雨により激甚災害。被害総額十一億円。
	一九六七	四二	文化協会設立。
	一九七五	五〇	中国縦貫自動車道開通する。吹田～落合。
	一九七六	五一	作東町町民憲章制定。
	一九八一	五六	作東町第一回愛と長寿のふるさとまつり開催。
	一九八三	五八	作東町町制施行三十周年記念式典。
			総合中央公園プロムナード・パーク完成。
			町の花（サクラ）・町の木（モミジ）・町の果実（ユズ）制定。
	一九八四	五九	作東町上水道事業完成。
			B&G作東海洋センター落成。
	一九八六	六一	海洋センター艇庫完成。
	一九八七	六二	作東町長寿町民顕彰条例制定。
			作東寮に小規模特別養護老人ホーム併設。
			総合中央公園王道の庭完成。
			少林寺拳法開祖宗道臣先生顕彰碑建立。
	一九八八	六三	総合中央公園にテニスコート完成。
			英北衛生施設組合ゴミ処理場完成。
			フランス・聖バレンタイン市と国際姉妹都市縁組。
			農村改善センター落成。
			総合中央公園噴水池完成。聖バレンタイン愛の泉と命名。
	一九八九	平成 一	農村広場に夜間照明施設設置。
		二	ふれあいスポーツセンター落成。
	一九九〇		江見小学校落成式。
		三	ふれあいスポーツセンター、ビリヤード室落成。
			テニスコート夜間照明施設設置。
	一九九一		バレンタインプラザ落成。
		四	土居小学校管理棟落成。
	一九九二		能登香の家落成。
			町役場新庁舎落成。
	一九九三	五	作東老人保健施設完成。
			作東町文化センター落成。
			春日座落成。
	一九九四	六	粟井小学校屋体改築。
			作東町国民健康保険作東診療所完成。
	一九九五	七	吉野小学校屋体改築。
			冒険の森完成。
			宮原獅子舞伝承館落成。
	一九九六	八	作東町学校給食共同調理場改築。
	一九九七	九	粟井小学校改築。
			バレンタインホテル落成。
	一九九八	一〇	吉野幼稚園改築。
			土居小学校屋体改築。
			土居幼稚園改築。
			豊野小学校、江見小学校に統合。
			豊野幼稚園、江見保育所に統合。
			台風一〇号、作東町に大被害を与える。
	一九九九	一一	福山小学校、土居小学校に統合。
			福山幼稚園、土居保育所に統合。
	二〇〇〇	一二	江見保育園完成。
			作東吉野ふんちゃい館落成。
			作東中学校屋内運動場落成。
			出雲街道土居宿西惣門復元。
	二〇〇二	一四	作東町斎場レインボーホール完成。
			さくとう山の学校オープン。
	二〇〇三	一五	町歴史民俗資料館完成。
			作東町町制五〇周年記念式典。
	二〇〇四	一六	作東町文化協会、文化誌三〇周年記念誌発刊。
	二〇〇五	一七	三月三一日美作市発足。
			町村合併により美作市文化連盟作東文化協会に名称変更。
	二〇〇六	一八	鎮江市少年少女訪日団、美作市訪問。万善山の学校・バレンタインプラザで交流。
	二〇〇七	一九	作東バレンタインパークが「恋人の聖地」に指定。県内二番目。全国五四番目。
			吉野小学校閉校式・吉野幼稚園閉園式。
	二〇〇八	二〇	光ファイバー引き込み工事始まる。
	二〇〇九	二一	九月集中豪雨。被害甚大。
			ケーブルテレビ運用開始。
	二〇一〇	二二	